

二〇〇九年、電子書籍時代を象徴する事件が起きました。電子書籍端末キンドルに向けて配信されたG・オーウエルの著作の一部で版權問題が発覚し、アマゾン社はその事実を通告し、返金した上で、当該の電子書籍をいっせいに消去したのです。

買ったはずの書籍を失った読者はショックを受けました。アマゾン社がオーウエルの描く「ビッグ・ブラ

ザー」そのものに思われたのですから……。オーウエルについてレポートを書いていた若者は、書きためた下線やメモを、電子書籍ごとそっくり消去されてしまいました。

電子書籍時代、わたしたちは「書物」を所有できません。電子書籍に付した下線や付箋、メモすらも、わたしたちの占有物ではないのです。わたしたちが所有できるのは、電子書籍への「アクセス権」にすぎません。「グレーブル・ブックス」に象徴される

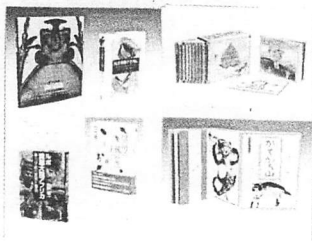
書籍電子化は、コンピュータの「クラウド化」と軌を一にして進められているのです。

詩人・長田弘は「本は、ハードウェアにしてソフトウェアであり、ソフトウェアにしてハードウェア」と述べています。ところが「ハードとソフトの分離」こそ、書籍電子化の最大のポイントなのです。身体的・物質的制約からの「知の解放」は、人類の「見果てぬ夢」でした。そして「身体性」を失った人間は果たして神になったのか、亡霊になったのか。わたしが「物である本」を強調するのは「ノスタルジー」からではありません。「読書」は「歴史」と「身体性」に深く根ざす営みです。「読書」は本文のテキストtextを視覚的に追う行為にとどまらず、自身を鳥瞰しながらコンテキストcontext（状況・文脈・背景）を五感で感受し、自己編集していく行為です。「装丁」という仕事も、要はテキストに「身体性（物質性）」というコンテキストを与える仕事と言えましょう。この本で伝えなかったのは、そんな「物である本」についての思いであり、記録なのです。

本とは何か？—「物である本」を考え味わい尽くす

1240 『本は物である——装丁という仕事』

桂川 潤 著 新曜社(2010年/2刷)



▲著者が装丁を手がけた本

本の装丁を仕事とする著者が、形ある物(モノ)としての本の魅力を語ります。本作りの現場を訪ね、自身が装丁を手がけた「吉村昭歴史小説集成」の印刷、製函、製本などの工程に立ち会った時に見せられた職人技は、「物の持つ無限の豊かさへの驚きと畏敬に裏付けられている」そうです。写真家の長倉洋海や訳者のさくまゆみことらの本作りの仕事も紹介され、手元にある本の表情がいつもと違って見えてきます。(小)

吉村昭
歴史小説集成

吉村昭

そして
事件は起きた

(215×141)
上製 242頁/
カラ—8頁)

本体 2,400円を

2,160円
(税込 2,268円)

かつらがわじゅん ● 1958年東京生まれ。装丁家。「本の花束—本号取り組みの「信州の風の色」わたしのハビリ闘争」の装丁のほか、岩波新書の新装版(寺よ、変われ「本は、これから」のデザイナ)も担当。共著書に「人権とキリスト教」、共訳書に「民衆神学を語る」。